特別講演会，技術展示コーナー，市民向け行事，見学会，交流会の報告

野田 利 弘 (のだ としひろ)
名古屋大学 減災連携研究センター

山田 正 太 郎 (やまだ しょうたろう)
名古屋大学大学院 工学研究科

1. 特別講演会

1.1 はじめに

第52回地盤工学研究発表会の特別講演会(口絵写真-1, 2, <http://u0u1.net/EDoR>)は、地盤工学会中部支部設立60周年記念行事の一環として中部支部との共催行事として開催しました。名古屋大会で力を入れてきた市民向け行事の1つということもあり、講師はこれまでとは少し趣向を変え、NPO法人ベースボールスピリッツ理事長の奥村幸治氏(口絵写真-3)にお願いしました。講演タイトルは「強い組織の作り方 ～イチロー・田中将大との出会いを通じて～」でした。

奥村氏は、イチロー選手が210安打を達成したときに、イチロー選手の専属打撃投手を務めていたことから「イチローの恋人」として有名となりましたが、プロ野球の世界で、チームを支える裏方として過ごした4年間の経験から強い組織をつくるポイントをたくさん経験しておられます。また、プロ野球退団後に結成した中学硬式野球クラブには、田中将大選手が教え子として入団しています。後のメジャーリーガーが現役時代あるいは学生時代にどのような考え方をして日々どのような行動をしていたのかを踏まえて、一流となるために必要なこと、強い組織を作るために重要なことについてご講演いただきました。以下にご講演の概要を示します。

1.2 講演概要

イチロー選手や田中将大選手など、一流選手は一流の習慣術を身に付けている。この時、高すぎる目標を掲げるのではなく、頑張ればクリアできそうな目標を設定し、それを毎日休みなくクリアし続けることで、一步一步努力の跡を積み重ねている。素質の高さでは片づけることのできない、このような小さな成功体験を積み重ねていく習慣術こそ、一流の一流たる所以なのである。目標設定においては、自分に何が足りないのか/何が必要なのかを見つけることが重要である。心技体のバランスを整え、自分で考え、自分で必要だと思ったことをとことんまでやり続ける。イチロー選手によると、この際「高すぎる目標を掲げない」ことも重要のようである。通常の「目標は高く持つ」と相反するように感じるかもしれないが、目標を高く持ちすぎると頑張っても達成できずに努力を諦めてしまうかもしれないからである。高い目標を持つなどと言う意味ではなく、頑張ったら手に届くところに目標を設定し、毎日少しずつクリアするように心が

けることで、努力を諦めることなく、自分を成長させることができるのである。

日本のプロ野球とアメリカのメジャーリーグの違いは、技術面や体格面の差よりも、コーチングの違いが大きい。日本のコーチングの基本は「与える」こと。「こうした方がいい」というアドバイスをくれるのが日本のコーチングだが、メジャーリーグのコーチングは「聞き出す」こと。選手の目的や悩みを聞きだしたうえでアドバイスを返してくれる。「与える」コーチングの場合、とすると、「やらされる」になってしまいがちである。受け身になるのではなく、主体的に動いて「やらされる」を「やっている」に変えることで、自分の中に目標をつくるという意識づけができるようになる。コーチ側も思っていることを素直に言える環境を作り、それを聞き出してあげる仕組みを作ることが大切である。

「相手の立場に立つ」ことも必要である。野球には攻めと守りがあるが、攻めの時は守りの、守りの時は攻めの立場に立ってみると、勝つために大事なポイントが分かってくる。身体の大きいパワーバッターはストレートを狙って思いきり飛ばしたいと考えるが、ピッチャーがその心理を読んでいけば、甘いストレートだけは投げまいと考えるだろう。逆にバッターはそのピッチャー心理を読んで、勝負どころで変化球にヤマを張る作戦も取ることができる。このようなことは、野球に限らない。会社の上司と部下が相手のことを考えずに、それぞれの立場だけでモノを言っていたら、一体感のある組織は決して生まれない。ポジションを入れ替えて相手を知ること、組織の連携がよくなるとともに、自分自身の成長にも繋がる。

1.3 おわりに

本特別講演会には一般市民の方も含めて450名を超える方にご参加いただきました。イチロー選手や田中将大選手といった普段テレビの中でしか見ることのできない一流選手の近くにいた奥村氏だからこそ、想いや気づきを、情熱たっぷりにお話いただき、時間が過ぎるのがあっという間に感じました。野球と会社・学校と種目は異なりますが、目標達成に向けたセルフモチベーションや組織/人材育成という点では共通することが多く、今回のご講演は皆様にとっても大変参考になる内容だったのではないのでしょうか。

最後になりますが、貴重なご講演をいただいた奥村氏に心からお礼申し上げます。

2. 技術展示コーナー

2.1 展示概要

技術展示は、平成29年7月12日～14日の3日間におたり、名古屋国際会議場のイベントホールにて開催しました。判定士会による住宅地盤相談会用のブースを含め、73ブース（80小間）の出展がありました。技術展示ブースでは、材料、調査・試験法、解析法、設計・施工法などの地盤工学に関する技術が広く紹介されました。

初日の中野実行委員長の挨拶（**口絵写真-4**）を皮切りに技術展示が始まり、その後、多くの方々が来場され、各ブースで意見交換・情報交換等が行われました。また、初日の夕刻には、出展者および学会参加者の歓迎行事を開催して、記念一合弁や地酒を提供するなどし、相互の交流を深める機会にもなりました（**口絵写真-5**）。来場者は、3日間で延べ約4000名（推計）であり、市民向け行事の一つとして各方面に事前周知したこともあって市民の方々の参加も目立ちました（**口絵写真-6**）。

より多くの方々が来場し、また、出展者や来場者の方々にゆっくりと楽しんでいただけるように、“にぎわい”のある会場づくりを目指して、スタッフ一同、おもてなしの気持ちを忘れずに、次の取組みを実践しました。

2.2 会場づくり

会場には、地盤品質判定士による住宅地盤相談会、起震車による地震体験、特別会員PR、ドリンク・和菓子、G-CPD登録の各種コーナーをそれぞれ併設しました。また、休憩・商談コーナーを設け、来場者や出展者に活用いただきました。終日BGMを流すことによって和やかな雰囲気も演出しました。

例えば、地震体験コーナーでは、名古屋市消防局のご厚意により、2種類の起震車（ジジジョ号とぐらぐら2）を日替わりで設置しました（**口絵写真-7**）。多くの方々に地震を体験いただき、防災意識の向上などに繋がったと感じました。ドリンク・和菓子コーナーでは、出展者と来場者の方々の休息の際にと思い、東海地区（愛知県・岐阜県・三重県）の冷たいお茶や水、温かいコーヒーや日本茶、名古屋の和菓子（6種類）を用意しました。特に和菓子などは各日で用意したものが品切れになるほどの状況で、楽しんでいただけたのではないかと考えています（**口絵写真-8**）。その他、展示ブースのレイアウトは、敢えて業種に関係なくランダムに配置することによって、出展者の相互交流を促すように工夫しました。

2.3 おわりに

アンケートによると、多くの出展者の方々が会場環境や各種の併催行事・併設コーナーにご満足いただいたようでありました。ブースに立ち寄られる来場者や、学生等の若い世代の来場をより促すためのご提案もいただきましたので、今回の経験が今後の糧となるよう、技術展示のあり方などを含めた課題を整理して、次期開催地に引き継ぎたいと思います。

最後になりましたが、出展者の方々、来場者の方々、また、出展者募集に際しお世話になりました各種団体・

機関の方々に、厚くお礼申し上げます。

3. 市民向け行事

3.1 はじめに

今回の研究発表会では、「今こそ、地盤工学 ～知る 学ぶ 備える～」をキャッチフレーズに、市民向け行事にも力を入れました。他の箇所でも記載している通り、特別講演会、地震体験車をはじめとする技術展示会場における催し、市民向け見学会はその一環です。名古屋市上下水道局のご協力により、災害用備蓄飲料水「名水」も、市民を含めた来場者の皆様にご提供させていただきました。また、地盤品質判定士会のご協力を得て、市民向けの住宅地盤相談会と住宅地盤講演会を実施いたしましたので、以下ではこれらの企画についてご説明させていただきます。

3.2 住宅地盤相談会

7月12日～14日までの3日間を通じて、技術展示コーナーの地盤品質判定士会ブースにて、「地盤品質判定士による住宅地盤相談会」を開催しました。同ブースでは、宅地地盤に関する技術、地盤に起因する住宅の被害のパネル、宅地地盤を簡易に調べるマップシステムなどを展示しました。ブースには2～4名の地盤品質判定士が常駐して、中部の地形、地盤調査法、地盤補強工法などの技術説明、個別の住宅地盤相談などに対応しました（**口絵写真-9**）。

一般市民からの相談件数は14件で、大半は「住宅地盤講演会」が行われた13日に集中しました。相談者の半数は講演会にも参加しており、講演会と相談会の組み合わせが集客に効果的だったようです。また、会員の場合は学会誌、一般市民の場合は中日新聞の記事で相談会の開催を知ったとのことでした。

主な相談内容は、安心安全な宅地探し、建築に当たっての留意点、交通振動、擁壁の不安、液状化など多岐にわたりました。中には、官庁の方がハザードマップに関する市民からの問い合わせに苦慮しているような案件もありました。その他に、自宅付近の地形や地盤の確認などに立ち寄る方々も多くあり、宅地地盤への関心の高さが感じられました。

相談員は地元と他地域の地盤品質判定士の混成チームでしたが、相談には地域性があるので、地元の地盤品質判定士の方々がスムーズに相談に応じることができていました。

3.3 住宅地盤講演会

7月13日13:20より「住宅トラブルのなぜ？ どうする？ なっとく！ ～住宅地盤に潜むリスクに関する講演会～」を開催しました。参加者は93名で、途中で客席用の椅子を追加するほどの盛況でした（**口絵写真-10**）。

講演は6名の講師により、地盤品質判定士についてから始まり、中部の住宅地盤、地盤に起因する住宅トラブ

ル、住宅減災、傾いた家の修復など、住宅地盤にかかわる一連の話がありました。また、トピックとして熊本地震の住宅被害と復興に関して、熊本で活躍中の地盤品質判定士による状況報告も挟みました。

地元名古屋の講師による「住宅地盤、中部地方をブラブラリ」と題する講演は、NHKの人気番組「ブラタモリ」風の味付けが好評で、講演中に「そうさそうさ」のささやき声も会場から聞こえました(口絵写真-11)。講師の方々には、平易な説明をお願いしましたので、一般市民の方々の理解も得られたようです。

参加者に対するアンケートで、今後このような宅地の講演会への参加意思を問うてみたところ、参加したいとの回答が9割以上もあり、住宅地盤に対する関心の高さが明らかになりました。

参加者のうち、土木系が約40%、建築系が約30%、一般市民が約20%でした。土木系の方々にとっては意外と知らない宅地地盤の話、建築系の方々には実務に係わる話、一般市民にとっては自分の住んでいる宅地の話にそれぞれ興味を持っていただけたのではないかと思います。

今後もこのような講演会を行っていくことで、一般市民に対しても、地盤品質判定士の知名度を高めていきたいところです。

3.4 おわりに

国土交通省中部地方整備局、愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市には、研究発表会全体の後援をいただきました。また、上記機関に加え、NHK名古屋放送局と中日新聞には、地盤品質判定士に関する二つの活動の後援をいただきました。本研究発表会の企画に、会員以外の多くの一般市民にもご参会いただけたのは、後援団体のご協力が大きかったように思います。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

4. 見学会

4.1 はじめに

見学会は、地盤工学会員を対象としたAコースと一般市民参加を主体としたBコースの全2コースを用意し、ともに全国大会の発表スケジュール終了後の7月15日(土)に実施しました。両コースとも地盤工学会ならではの土に関係の深い見学箇所とし、特にAコースでは発電に関する施設はもちろん巨大防波壁の直下で工事にかかわった方々から専門的なお話を聞く贅沢な内容となりました。7月に入ってから見学会の直前には各地で豪雨があり、開催を心配しておりましたが、当日は両コースとも晴天に恵まれ絶好の見学会日和となりました。

4.2 見学会のコース

(1) Aコース：浜岡原子力発電所(参加者21名)

今回のツアーは名古屋発～現地～名古屋着を基本としつつも復路で掛川駅下車を可能としたことで、その日のうちに帰宅できた参加者が多く、応募につながったのではないかと考えられました(参加者21名中、掛川駅下車

15名)。

・原子力館：燃料棒の模型や説明用パネルの解説が分かりやすく、参加者は興味を持って見学していました(口絵写真-12)。

・防波壁：地盤工学における専門集団とあって、参加者からは積極的に専門的な質問がなされました。南海トラフ巨大地震に伴う津波対策として築造した海拔22mの高さの防波壁の構造の見学時に、基礎や壁の構造的な質問や現位置の地盤の質問など専門的で学識ある質問が数多く飛び交っていたことが特に印象的でした。砂丘堤防は実際に見ると巨大な森で、東日本大震災の津波被害を経験する前ならば、防波壁が必要だと主張するほうが異端な意見に感じられたのかもしれないとの声も聴かれました。

・5号機原子炉建屋内：心臓部に入っていきうよう、緊張した面持ちの参加者もいらっしゃいました。実物を見せていただきつつ適宜パネルなどで追加の説明をしていただき、非常によく理解できました。軽水炉に関する質問に対し、原子炉を冷媒を用いずに普通の水で冷やすタイプ(軽水(普通の水)が減速材と冷却材に兼用されているのが特徴)のことであるとの説明がありました。

・原子力発電所敷地内：これまでの知見を生かしたリスク管理のお手本のような情景が広がっていました。電源車・ポンプ車などが20台以上あり、それらは竜巻対策でコンクリート床板に固定され、しかも海岸沿いの野外にあるとは思えないほど磨かれていました。東日本大震災福島第一原発事故の教訓をふまえた4重、5重の安全対策がなされていることが良く分かりました。

・見学を終えて：原子力館で年間10万人以上、セキュリティの厳しい原子力発電所内にも2万人の見学者を受け入れているとのことでした。この2万人には小学校なども含まれているとのこと、基本的には個人では難しいけれども、会社などの組織単位であればよいのでぜひ戻られましたら職場でお誘いください、とお話でありました。厳格なセキュリティ体制の中、中部電力の皆様には非常に丁寧で分かり易い説明をしていただきました。心より感謝申し上げます。参加した方々にも、満足いただけたのではないかと思います(口絵写真-13)。

(2) Bコース：金城ふ頭再編工事・ジオ・ラボ中部(参加者29名)

市民向け見学会として、金城ふ頭の再編工事～名古屋港海上交通センター～中部土質試験協同組合ジオ・ラボ中部の施設見学を行いました。今回は定員30名を大きく上回る70名の応募があり、抽選のうえ29名(35名に当選通知後、6名のキャンセル)に参加いただきました。応募者の多くは60代以上でありましたが、家族連れにも多数ご参加いただきました。

金城ふ頭の再編工事では、工事の目的と概要が説明されました(口絵写真-14)。大型機械を用いた杭打ち現場の見学に加え、建設重機に試乗したり、測量機器を実際に使用したりするなど、見学者自身が体験できたことで、

充実感が得られていたように思いました(口絵写真-15)。

名古屋港海上交通センターでは、職員の方から名古屋港の成り立ちやセンターの役割などの説明を受けました。名古屋港の先端にあり、眺めがよく、大型船が行き来するなど参加者の関心も高かったように思います。見学者からも東南海地震などの巨大地震の際に津波が発生した場合、どのような対応を取るのかなど、積極的に質問される姿が見られました。また、これらの見学先は立ち入り制限区域に指定されているため、日ごろ一般市民の方が入ることができないこともあり、喜ばれていました。

ジオ・ラボ中部では、名古屋の地盤についての講習会(口絵写真-16)と液状化の実験(口絵写真-17)などが行われました。液状化のモデル実験は実際の東日本大震災などの液状化の状況が市民の方々に理解しやすかったようです。また、名古屋の地盤について知識がついたと市民の方から感想をいただきました。

今回の市民見学会は、例年行っている中部支部の活動の延長として行ったことが、多数の応募が得られたことの一因であると思います。リピーターも増えており、地盤工学会の活動が市民の方々にも少しずつ浸透しているものと感じております。また、今回のように一般市民の立ち入りが制限されている見学先について、多くの方々が関心をもたれていることを実感できました。

4.3 おわりに

最後になりましたが、見学会にご参加いただいた皆様、見学会を受け入れていただいた関係諸機関(中部電力㈱、国土交通省中部地方整備局港湾空港部、中部土質試験協同組合ジオ・ラボ中部)の皆様並びに地盤工学会中部支部見学会スタッフをはじめ関係者の皆様には、大変お世話になりました。お礼を申し上げます。

5. 交流会

5.1 はじめに

第52回地盤工学研究発表会(名古屋大会)の交流会にご参加いただきました皆様に、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。この交流会は、地盤工学研究発表会に全国から参加される研究者の皆様が、情報交換と交流を深める場であります。

本大会から開催期間が盛夏の7月に早まり、交流会当日も大変暑い日となりました。事前申込者114名、技術展示出展者80名、招待者3名、当日申込者210名の合計407名(うち、学生26名)のご参加をいただき、盛大に開催することができました。

5.2 次第

交流会は、特別講演会の終了後、18時10分に開場しました。参加者はウェルカムドリンクを手に会場に入り、3名の来賓入場の後、18時30分に司会より交流会の開宴が告げられました。

交流会は中野実行委員長の参加者へのお礼を含めた挨拶で始まり(口絵写真-18)、続いて村上会長に挨拶をいただきました。村上会長からは、地盤工学会の会員数の

推移に関してパワーポイントを用いた話題提供がありました。

来賓として、愛知県知事の大村秀章様(口絵写真-19)、名古屋市長の河村たかし様(口絵写真-20)、国土交通省中部地方整備局長の塚原浩一様(口絵写真-21)をお招きし、3名の方のご紹介および各々よりご祝辞をいただきました。大村様と河村様にはユーモア溢れるお話で交流会を盛り上げていただきました。塚原様からは地盤工学会に関連したお話をいただくとともに、我々研究者、技術者への心温まる激励をいただきました。

来賓のご祝辞の後、西村調査・研究部長の乾杯の発声で祝宴の開始となりました(口絵写真-22,23)。近年、国内だけでなく海外でも人気のある「名古屋メシ(手羽先、天むす、あんかけスパゲッティなど)」の屋台と東海地方で有名な地酒のコーナーが振舞われ、参加者の皆様から好評をいただきました。

交流会も終盤となり、次期開催地四国支部の皆様に登壇していただき、代表して長谷川様から第53回地盤工学研究発表会(高松大会)のPRを兼ねたご挨拶をいただきました(口絵写真-24)。最後に、守屋実行副委員長(中部支部長)に閉会のご挨拶をいただきました。

5.3 おわりに

最後になりましたが、公務ご多用の中、交流会にご臨席賜りました来賓の皆様、交流会の設営、運営にご協力いただきました交流会スタッフをはじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

謝辞：本報告は、特別講演部会、展示部会、見学会部会、交流会部会、ならびに地盤品質判定士会からいただいた報告内容を取りまとめたものです。

(原稿受理 2017.9.2)